

ウェールズ大学トリニティ・カレッジ調査報告 および交流に向けての提言

A Report on the Visit to the University of Wales, Trinity College Carmarthen to Seek a New International Link

鈴木 元子

文化政策学部国際文化学科

Motoko SUZUKI

Department of International Culture, Faculty of Cultural Policy and Management

森 俊太

文化政策学部文化政策学科

Shunta MORI

Department of Regional Cultural Policy and Management, Faculty of Cultural Policy and Management

中尾 知彦

文化政策学部芸術文化学科

Tomohiko NAKAO

Department of Art Management, Faculty of Cultural Policy and Management

2006年11月にトリニティ・カレッジの代表者2名が本学を訪れた。その返礼も兼ねて、2007年9月に文化政策学部国際交流委員の3名が特別研究費の助成により同大学を訪問した。本稿では大学の概要や周辺の環境、留学プログラムについてまとめ、SUAC生の留学先としての評価も行った。さらに、同大学と文化政策学部の教育内容を比較して、共通点や交流により互恵となる分野の概要を示した(観光学、広告、アウトドア教育学)。芸術文化学科の立場からは、アーツ・マネジメント・プログラムについて調べ、両大学の教育内容の比較を行った。アーツ・マネジメント・プログラムを有している大学は世界でも限られるので、教育の充実と研究の向上のため、交流促進が望まれる。また国際文化学科・文化政策学科にとっても交流できる共通の教育分野が多くあること、1ヶ月の語学研修、および1~2セメスターの長期留学によっても単位取得が可能なことなどから、大学間で国際交流を積極的に推進すべきであるという結論に至った。

Two representatives of the Trinity College visited SUAC in Nov.2006. In return for it, we, three members of the International Exchange Committee explored the College on our special research Sept. 2007. In this paper we inform on her history, environments, academic programs including the International Foundation Program with an observation and evaluation as a prospective sister college for the SUAC students to study abroad. By comparison of educational programs, the interested courses we can share such as Tourism, Advertisements, and Outdoor Education are pointed out. Especially, as there are few colleges in the world which have Arts Management Program, the Trinity College and SUAC will be able to strengthen a close tie henceforth in order to increase the quality of Arts Management education and to expand the research in this area. It is concluded that we should promote academic cooperation and exchange between the two by reason of common academic fields, and from the point that SUAC students can earn credits in the short term summer English Program as well as the long term Foundation Program.

「ウェールズ大学トリニティ・カレッジ・カマーゼン」(University of Wales, Trinity College Carmarthen) (以下「トリニティ・カレッジ」と略す)は、英国、ウェールズのカマーゼンにある大学である。

これまでの経緯を略述すると、2006年10月にトリニティ・カレッジ側から、大学間交流をしたい旨の手紙と大学案内が本学(静岡文化芸術大学)に郵送された。トリニティ・カレッジの代表が、10月29日から11月4日に来日する予定があり、それに先んじての書状であった。日程調整をした結果、2006年11月3日(碧風祭前日)に、ケヴィン・パリ・マザリック(Kevin Parry Matherick) 文芸社会学部学部長(Head of the Faculty of Arts and Social Studies)とキャスリーン・アドナム(Kathleen Adnum) 国際交流開発課主任(International Officer)が来校

された。その内容については国際交流委員会に報告され、同委員会で検討していくことになった。

その後、キャスリーン・アドナム国際交流主任と定期的にメールのやり取りを始め、国際交流の具体的な可能性を探っていくためにトリニティ・カレッジを訪問する必要性が生じ、文化政策学部の国際交流委員3名が、所属する学科に関連する教育内容を中心に調査することになった。今回、2007年9月にトリニティ・カレッジを訪問して、学長はじめ諸先生方と面談し、またキャンパスの諸施設を見学した。カマーゼン市のみならず周辺地域にも足を伸ばした。本稿はその訪問・調査報告書であり、同時にトリニティ・カレッジと本学における交流のあり方についての提言を含むものである。

1. 大学の概要

1-1. トリニティ・カレッジについて

トリニティ・カレッジはウェールズに高等教育機関が欠けていたことから、1848年に英国国教会系のカレッジとして設立された古い伝統のある大学である。2005年に、英国国立ウェールズ大学 (the Federal University of Wales) に組み込まれ、同大学の8つのカレッジのうちの1カレッジになった。ウェールズ大学は英国第2位の規模を誇る大学で、学問の面だけでなく、産学協同の研究開発でも優れた学部が数多くあることで知られている。ロンドンから西に車で3時間ほど、ウェールズの首都カーディフからは1時間ほどのところにキャンパスがある。もともと教員養成大学であったが、1980年代にカリキュラムを改革して、伝統的な神学や歴史や英語といった科目に加え、広告やツーリズムなどの新しい科目を採り入れた。1990年代には、大学院のコースも開設された。しかし、教職課程が今も核となっていることに変わりはない。

1-2. 学科代表教員との面談

トリニティ・カレッジには本学の学科に相当するものとして、「Creative Arts and Humanities」、「Computing, Business and IT」、「Early Years Education」、「Education Studies and Social Inclusion」、「Sport, Health and Outdoor Education」、「Teaching」、「Theatre and Performance」、「Theology and Religion」、「Tourism」がある。

今回の訪問では、ロンドン・ヒースロー国際空港に大学の運転手が迎えに来てくれた。訪問中は、国際交流室の前述したキャスリーン・アドナムさんやアシスタントのルイーズ・ジョーンズ (Louise Jones) さんが面談の手配やキャンパス案内等をお大変良くしてくださいました。メドウィン・ヒューズ (Medwin Hughes) 学長、ブライアン・クラーク (Brian Clarke) 教授* (<Director of Resources and Operations>)、カトリン・トーマス (Catrin Thomas) 教授 (<Academic Registrar>) と面談し、お互いに大学の概要

を説明し、国際交流の可能性について話し合った。さらに、教学関係者では、アーツ・マネジメント研究科のクレア・トーマス (Clare Thomas) 教授、創造美術・人文学科のマルカス・レニング (Marcus Leaning) 教授、情報処理学・ビジネス学科のニア・シギンス (Nia Siggins) 教授、経営学のアンソニー・サミュエル (Anthony Samuel) 教授、スポーツ・健康・アウトドア教育学科のアンディ・ウィリアムズ (Andy Williams) 教授、教育学科のダフネ・エバンズ (Daphne Evans) 教授、神学・宗教学科のグレゴリー・バーカー (Gregory Barker) 教授、マーケティング・リクルートメントのエルリ・ベイノン (Eleri Beynon) 教授、および音楽が専門のエイリル・グリフィス (Eilir Griffiths) 教授たちとそれぞれ1時間ほど面談し、各学科 (研究科) の教育内容について意見交換をした。(*英国と日本の大学教員の職階制度が異なるためここではみな教授と記した。)

1-3. 学生および留学生について

2007年新学期 (秋学期) 現在の学生数は約1800人で、そのうち留学生数は46人である。留学生の多くがヨーロッパからの学生で、その次に多いのがアメリカからだそうである。

2002～03年の数字によると、トリニティ・カレッジの大多数 (92.4%) がウェールズ出身者である。男女別割合は、学生のおよそ75%が女子学生で、本学と類似している。また、人種的マイノリティーは3～3.5%であるという。欧米からの留学生は多いがアジアからは少なく、昨年度は日本人留学生が唯一人しかいなかったが、今期は5名が入学した。内1名は日本の大学を卒業してトリニティ・カレッジの大学院に入学している。また、1名は日本の高校を卒業後、日本の大学に進学せずに、そのままトリニティ・カレッジに入学した。その他、交流関係にある日本外国語専門学校 (Japan College of Foreign Languages) から学生が留学しているようである。

2. 大学および周辺の環境

2-1. ウェールズについて

ウェールズ¹は、英国（グレートブリテンおよび北アイルランド連合王国）に属する公国の一つである。英国西部に位置するウェールズは、イングランド、スコットランド、北アイルランドと共に英連合王国である英国を構成している。首都はカーディフ。ウェールズの人口は約300万人（英国全体の5%）。1999年5月に地方分権政策が進んで、「ウェールズ議会」が設立されたことにより、軍事（国防）と外交の他はロンドンの政府に左右されることなく、地域色を出せるようになった。そこで、カーディフにあるウェールズ議会がウェールズにおける医療、教育、住宅、農業、経済開発、雇用開発、交通、文化、環境、スポーツ・レジャー分野を担当している。

ウェールズの面積は2万720平方キロで、四国4県の総面積1万8803平方キロより少し広いくらいのほぼ同じ面積である。気候については1日の平均気温で見ると、8月が21℃、1月が7℃と1年を通じて温暖といえよう。国旗には赤い龍²が描かれ、国章はリーク（西洋ネギ）と水仙、守護聖人はセント・ディビッド³である。弦が3列あるトリプルハーブがウェールズの国家を代表する楽器として知られている。ウェールズ国歌は1856年に機織職人エヴァン・ジェームズにより歌詞が書かれ、1874年に初めて演奏されたものである。

ウェールズ人の英語はよく歌を歌っているような英語といわれる。ウェールズでは現在、英語とウェールズ語が公用語であるが、実のところウェールズ語を話せる人は人口の約20%（60万人）しかいない。1967年のウェールズ語法の公布によって公用語として認められ、つまりウェールズ語が正式に復活した、という歴史的背景⁴があるからである。道路標識にはウェールズ語と英語の両方が併記されている。ウェールズ語の特徴は、独特の「詩的な響き」にある。今日ではウェールズ語を学ぼうという青少年が増え、ウェールズ語学習のウェブサイトも用意されている。ウェールズ語は英語の方言ではなく、別個の

言語であることに注意したい。ウェールズ語に関心のある方には、ウェールズ語委員会サイトの「www.bwrdd-yr-iaith.org.uk」やBBCのサイト「www.bbc.co.uk/wales/learnwelsh」が音声も聞けて便利である。

ウェールズは地平線まで広がる緑の丘、川、ウォーターフロント、山々と、その美しい景観で有名である。都市部と田園地帯の距離が近いのも特徴の一つである。今回の訪問を通して、ウェールズ人が人情味に溢れ、もてなし上手な人々であることを自ら体験することになった。自然が豊かなため、アウトドア・スポーツが盛んで、ウォーキングやハイキングのみならず、トレッキングやロッククライミング、サイクリング、そしてゴルフや乗馬、ウォータースポーツと、枚挙にいとまがないほどである。ウェールズの文化としては、庭園、神話、口承文学、城、ラプスプーンに代表される工芸品などをあげることができる。大学のあるカマーゼン市は魔法使いマーリーの生誕地といわれているが、アーサー王伝説との関連や、『マビノギオン』⁵に代表される物語集や民話なども傑出している。年間を通して、スポーツのイベントから英国文学や音楽の祭典などが目白押しの土地である。トリニティ・カレッジから40分くらい車で行ったところに、ウェールズの詩人ディラン・トマス（Dylan Thomas）⁶のポート・ハウスがあり、観光客が絶えない。

2-2. ウェールズの日系企業

英国西部に位置するウェールズは、欧州連合（EU）内の活発な経済地域として広く認知されている。ウェールズ議会政府（Welsh Assembly Government）⁷に所属する「インターナショナル・ビジネス・ウェールズ」（International Business Wales, IBW）は東京の虎ノ門に事務所をかまえ、日本企業のウェールズ進出をサポートしている。このIBWの分析によれば、ウェールズに数多くの先進企業が進出している理由は：（1）英語圏市場への最も適切なゲートウェイ、（2）整備された交通基盤により英国全土と欧州に直結、（3）競争力ある不動産価値と豊富な開発用地、（4）世界水準の学術基盤、（5）教育水準も高く勤勉な労働力、（6）高い従業員定着率、

(7) 革新的なテクノロジーを醸成する文化的背景、(8) EUの中で最も低い30%の法人税、(9) 西欧において最も低い水準にある総労働コストと個人所得税、(10) 安い生活コストで英国の好調な経済と整ったビジネス環境を享受できるメリット、(11) 素晴らしい自然環境と多様な文化、豊富なエンターテインメント、優れたクオリティー・オブ・ライフ、であるという。この分析は、日本企業の進出先選定のためばかりか、日本人学生が留学する大学を選定するときにも、また日本の大学が交流先を決めるときにも、参考になる項目ではなからうか。

英国内で最も自動車部品メーカーが集中しているのがウェールズであり、一次部品メーカー40社を含む150社がウェールズに拠点を設け、ジャガー、トヨタの欧州生産車エンジンは全てウェールズ製であるという。また、ソニー、松下電器を含む世界のエレクトロニクス企業の約300社がウェールズに拠点をもち、ウェールズに進出している日本企業は46社を数え、名前を上げると次の通りである——ブラザー工業、カルソニックカンセイ、ダイニック、ハヤカワ電線工業、日本ケーブル・システム、日立電線、HOYA、近鉄エクスプレス、コニカ、丸紅・小松製作所、松下電器産業、松下電子応用機器、明輝、高尾金属工業、三井金属・三井物産、武蔵精密、ナ

ビックス、日信工業・ショーワ、オリオン電機、プレマティックコーポレーション、三菱商事、河西工業、応用地質、ローランド、ローランドディーゼル、サンケン電気、住友電工、積水化学工業、シャープ、正田醤油、ソニー、住友電工・住友電装、住友精密工業、ユーラスエネルギーホールディング、巴トライテック、巴バルブ、テクノアソシエ、東洋シール工業、ジェイテクト、トヨタ自動車、シミズ工業、東海理化、山田製作所、ユアサ、日本ゼオン、パルステック工業（平成19年4月現在）。

また、ウェールズでは政府の支援で新エネルギー開発が急速に進展していると聞く。特に、燃料電池の開発や太陽光発電産業である⁸⁾。水資源の保護においても世界中の企業や団体に専門知識を提供している。

2-3. キャンパスとその施設について

トリニティ・カレッジのキャンパスは、カマーゼンの市街地のはずれに位置するが歩ける距離であり、カレッジ創立当初の歴史あるヴィクトリア朝の本館やチャペルと、最近建てられた幾つかの新しい校舎が調和しながら建っている。美しいガーデンもあり、風光明媚な周りの景色と相まって目を楽しませてくれると同時に、どこかリゾート地にいるような感覚にさせられる。娯楽施設としては、スチューデント・ユニオンの建物の中に、まさ



ウェールズ大学トリニティ・カレッジの本館

にパブのようなバー・カウンターやビリヤード室があり、フィットネスクラブ棟、ロッククライミングの練習ができる体育館や、温水プールもあり、キャンパスの中で充分楽しむことができる。もちろん、ラグビー部を始め各種運動部や色々なサークルもある。また、魔法使いマーリンの名をとった「マーリン・レストラン」(the Merlin Restaurant)という学生食堂が学生たちの食事と憩いの場所になっている。この学食では、温かいスープや、調理したメイン料理と温野菜の副菜など、作りたての温かいものが食べられる。サラダも各種そろったサラダバーになっている。カマーゼン市の周りには農場や牧場が散在しているので、地元産⁹のお肉や野菜、果物が豊富にあり、新鮮でおいしい。

学生寮は一人一部屋で、部屋の中にトイレとシャワー・ルームがあり、日本流に言えば、ワンルーム・マンションのような部屋もある。1日2食を学食で食べても、あと1食は自炊することができる。各階に共同で使用する広いキッチンがあり、筆者たちが見学したキッチンには、冷蔵庫が4台、そして大型の冷凍庫が2台あり、学生たちは共同で使用していた。キッチンに立つと話もはずみ、他の学生たちとの良い交流の場になるように思えた。

3. トリニティ・カレッジの文化政策や地域政策について

静岡文化芸術大学の文化政策学科は、文化政策学という学際的な分野を、地域社会文化と、産業社会文化という2点に焦点を置きながら教育・研究する学科である。また、専門カリキュラムは政策、経営、情報という3つの分野に組織されており、それぞれの視点から専門的な知識を学び、地域文化と地域産業の現場体験を重視する教育を行っている。このような文化政策学科の教育と研究の特徴を踏まえて、トリニティ・カレッジの教育と研究プログラムの中から、本学の文化政策学科に特に関連があると判断した分野を以下に記す。

3-1. 観光学 (Tourism)

現在、トリニティ・カレッジの観光学の科目は、「観光と地域開発学科」(Tourism & Community Development)と「情報処理学・ビジネス学科」(Computing, Business & IT)の2学科の下に開設されている。前者は文化遺産観光や観光経営などの6専攻、後者は「ビジネスと観光」、および「情報システム学と観光」の2専攻として組織されている。城跡やケルト文化などの文化遺産や炭鉱を中心とした産業遺産が豊富であるウェールズ地



学生食堂のサラダバー

方では、その就労人口の10%が観光に従事しており、観光は産業としても学問としても重要視されている。他方、本学の文化政策学科には、産業遺産や産業考古学を専門とする教員もおり、また近年、学生の関心も高まっているので、現在、観光学に関する科目の新設も検討されている。その際、トリニティ・カレッジに開講されているケルト民族の伝統文化や、産業遺産と観光の関係について学ぶ科目などは、非常に良い参考事例となるであろう。

観光学科のシギンス教授は筆者（森）に対し、トリニティ・カレッジの観光学専攻の学生が、研修旅行で静岡県／浜松市を訪問して、静岡文化芸術大学で発表会を開催するなどの交流試案を提示してくれた。本学では、国際交流協定を結んでいる韓国の湖西（ホソ）大学校の学生を招いて、舘山寺にて温泉や観光をテーマに国際交流セミナーを開催した経験もあるので、それを参考にトリニティ・カレッジの大学生との短期交流会を検討することも可能であろう。

3-2. 広告 (Advertising)

トリニティ・カレッジの広告学専攻は創造的芸術・人文学科に所属しているが、その特徴としては、メディア専攻との二重専攻が可能なことである。そのような二重専攻は、英

国ではほとんど例がないとのことである。また、面談したレニング教授によると、広告専攻プログラムでは、学生が企業に広告企画案のプレゼンテーションを行うなどの実践的な指導をしており、実際に優れたプレゼンテーションを行った学生がEUの大手銀行に採用された例もあるそうである。また、広告学専攻プログラムはウェールズの首都であるカーディフにあるウェールズ国営テレビ局と産学協同事業も行っており、テレビ局は広告専攻学生のインターンシップ受け入れ先や就職先にもなっているという。ちなみに、レニング教授は北海道大学で客員教授を務めるなど日本滞在の経験がある知日家で、教授夫人も日本のJETプログラム(The Japan Exchange and Teaching Programme)で来日し、広島で英語教師をした経験をもつ方である。レニング教授からは、必要があればトリニティ・カレッジと本学との橋渡し役として協力したい旨の申し出も得ている。

3-3. アウトドア教育学

トリニティ・カレッジのスポーツ・健康・アウトドア教育学科には、豊かな自然を活かしたアウトドア教育という専攻がある。アウトドアというと、登山やマリンスポーツなどの野外スポーツ技能を学ぶという印象が強いが、野外環境を生かした体験学習方法、つまりそ



キャンパス内のシアター

のような教育理論や方法および応用を学ぶ学問分野と捉えるのが正しい。この分野は、この10年ほどで急速に英国を中心に欧米圏で発展を遂げ、英国内の大学にもアウトドア教育の専攻を持つ大学が急増し、環境学、観光学、チームワークやリーダーシップ育成などを含む人材開発学などの分野との連携も増えてきている。

浜名湖や天竜川を始めとする広範囲なウォーターフロント、および南アルプス山系を含む広大な山林を有する浜松市、また富士山や伊豆など有数の自然と観光地を持つ静岡県に位置する本学としては、他の大学に先駆けて、自然環境における活動技能を身に付けつつ、環境問題や、都市と自然の共存などについてフィールドワークを中心に取り組む教育プログラムを開設することは建学の理念にかなっている。筆者（森）は1989年から2年ほど、英国に本拠を置くアウトドア研修会社の講師として主に企業の社員を対象にした研修を実施してきた。その後も、臨時的にアウトドア研修に関わっており、アウトドア教育の効果の高さについては確信を持っている。本学の「出会う、感じる、創造する」の教育理念と、人々との交流や町づくりを目指す文化政策学科としては、アウトドア教育を取り入れることは大きなメリットがあると考えられる。

具体的には、文化政策学科の学生がトリニティ・カレッジに留学して、アウトドア教育の科目を履修することにより、本学で学んだ知識と経験をより実践的、創造的に展開する知見を得ることが出来るだろう。また、トリニティ・カレッジのアウトドア教育担当者を招いて、アウトドア教育について詳しく講義をしてもらうような科目を、学科の集中講義として導入することも考えられる。

その他にも、トリニティ・カレッジは、地域社会の開発（町おこし、村おこし）と若者の就労支援を合わせたカリキュラムである「地域開発」(Community Development)専攻や、ウェールズ語とウェールズ文化の再生と維持を目的としたバイリンガル教育に関するカリキュラムである「Welsh & Bilingual Practice in Early Years」など、地域の特色を活かした教育プログラムを持っているので、さらに今後も調査を継続する必要がある。

文化政策学科の学生の留学先として、トリニティ・カレッジは、英国や、英国内でも特にウェールズに関心があり、また広告、観光、アウトドア教育手法などの分野に関心がある学生にとって、真に望ましい大学といえる。英語力が不足する学生には、一年間または半年間のファウンデーション・プログラムを受けてから、学部レベルの科目を履修するのが現実的であり、実際、そのような形態の留学をする学生が主になるであろう。



詩人ディラン・トマス のボート・ハウス

4. トリニティ・カレッジのアート・マネジメント・プログラムについて

トリニティ・カレッジとの交流の可能性について考える前に、アート・マネジメント教育の現状を正しく認識し、国による状況の違いを理解しておく必要があるため、アート・マネジメントの歴史を顧みることから始めたい。

4-1. アート・マネジメント・プログラムの誕生

ニューヨークのコロンビア大学(Columbia University)のジョアン・ジェフリ(Joan Jeffri)教授によれば、アート・マネジメント・プログラムは1950年代にイギリスで職業訓練のためのコースとして誕生し、60年代にアメリカで大学教育に組み入れられて発展した歴史があるという¹⁰。アメリカでは、古いところでは1966年にエール大学(Yale University)が、その翌年シンシナティ大学(University of Cincinnati)が、69年にはウィスコンシン大学マジソン校(University of Wisconsin-Madison)とカリフォルニア大学ロサンゼルス校(University of California at Los Angeles)が、アート・マネジメント・プログラムを開講している。カナダでは1969年にトロントのヨーク大学(York University)が開設しているし¹¹、イギリスでは1967年にポリテクニク・オブ・セントラル・ロンドン(Polytechnic of Central London)内に1年間のコースが作られ、これが有名なロンドンのシティ大学(City University)のアート・マネジメント・プログラムへと繋がっていく¹²。

日本の大学では、1991年に慶應義塾大学文学部に開講された「アート・マネジメント」、および「アート・プロデュース」両講座が初期の例といえる。「アート・マネジメント」講座はビジュアル・アートに関するもの、「アート・プロデュース」はパフォーミング・アートに関するものであり、講師は各界から毎回ゲスト・スピーカーを招く形で実施された。単一の授業プログラムとしてではなく、学科として誕生したのは、1994年の昭和音楽大学音楽芸術運営学科が日本初である。

4-2. アメリカのカリキュラムの例

最も発展し、体系化かつ規格化・標準化されているアメリカのカリキュラムを知ることには、日本のアート・マネジメント教育を考える上で有用である。そこで、今度はアメリカのアート・マネジメント教育のあらましについて記すことにする。

アメリカの関係者の間では、「アート・アドミニストレーション」(Arts Administration)(≒アート・マネジメントArts Management)とは「非営利の芸術(文化)組織の経営」のことである、という共通認識があるように思われる。アート・アドミニストレーションの同義語としてアート・マネジメントという語があるわけだが、アメリカではどちらかというと、アート・アドミニストレーションの方が多用されている。シンシナティ大学アート・アドミニストレーション・プログラムのスティーヴン・モリソン(Steven Morrison)准教授によると、アメリカでのアート・アドミニストレーションとアート・マネジメントとの語感の差異は、アート・アドミニストレーションが非営利芸術組織にまつわる概念であるのに対し、アート・マネジメントは非営利芸術組織に加え、一部の営利芸術組織をも含んで使用される例がみられるという点にある。

アメリカのアート・マネジメント・プログラムは経営学の主な領域を網羅し、マーケティング、ファンドレイジング、会計学、ファイナンス、人的資源管理論、組織行動論、文化政策、経済学、その他関連する法律、教育、統計学、定量分析(Quantitative Analysis)、ITなどが履修科目として含まれる。マネジメントを学ぶことが目的なので、美術、芸術学あるいは実技のようなアートの中身に関する科目は、含まれていても多くはない。

欧米のアート・マネジメント・プログラムは大学院教育として発展してきたので、大半が修士課程であり、学部プログラムは数において少ない。入学してくる学生は、学部を終えた後に数年ほど芸術組織等での実務経験を経てから大学院に再入学してくることが多い。実務経験の有無は入試の可否を決定するにあたり考慮されるし、実務経験があることを入学の条件としているところもある。そし

て、大学院修了後は芸術組織のシニア・マネジメント・チームの一員として再就職する機会が多い。

シンシナティ大学のアート・マネジメント・プログラムのアラン・ヤーフェ（Alan Yaffe）教授と前述のモリソン准教授によると、アート・マネジメント教員になる最低条件（Minimum Requirement）は、アート・マネジメントの実務家養成を主眼とするコースの場合、MA等のアート・マネジメント関連の修士号（呼称は色々ある）、あるいはMBA、MFAなどの修士レベルの最終学位（Terminal Degree）を持ち、民間芸術組織や芸術関連政府機関でおよそ5年以上の実務経験を有することだそうである。もちろん、博士号取得者は優遇されるが、アメリカではアート・マネジメント教員になる必須の条件ではないと考えられている。もちろん、アート・マネジメント分野の研究者養成を主目的とするコースの教員になるには、博士号を取得していることが必要条件になる¹³。

4-3. 日本におけるアート・マネジメント観

一方、我が国ではアート・マネジメント・プログラムの導入から十数年が経ったが、その定義は未だ定まっていない。しばしば耳にするのが、「アート・マネジメントとは、芸術と社会の関係をつくるもの（あるいは、芸術と社会の関係を考える分野）」であるという考え方である。この定義は間違いではないが、あまりに漠然としているし、方法論も明確ではなく、曖昧な面が残ることは否めない。これは定義というよりも、アート・マネジメントのゴールと考える方が今後の発展には有益であろう、と筆者（中尾）は考えている。

日本では種々の理由のために、アート・マネジメントを狭義のマネジメント（経営学）だけに限らず政策的分野にまで拡大し、より広い範囲まで含めて考える人もいる。アート・マネジメントとしばしば一緒に使用される語として「文化政策」がある。アート・マネジメント・プログラムにおいて、マネジメント（経営）とポリシー（政策）の双方を学ぶことは必須であるといえる。両者は分かちがたく、研究の切り口によってマネジメントに寄ったりポリシーに寄ったりするが、日本

のアート・マネジメント教育では、マネジメントから離れてポリシーに寄っている内容が多いのではないかと思われる。結果として、マネジメント分野の研究の蓄積は現状では多くはない。

同志社大学の河島伸子教授は日本のアート・マネジメントの混乱した状況を次の3つの分類によって整理しようとしている。

- (1) 文化活動そのものの内容の企画（企画的マネジメント）
- (2) 団体の経営実務（資金獲得、会計、マーケティングなど）
- (3) 文化と社会を結び付ける作業（支援者を含む社会との関係のマネジメント）¹⁴

アメリカではアート・マネジメントとは(2)の実践と研究のことであるが、日本では(1)と(3)に関心を持って議論する人が多いのが現状のようである。そういった中で、昭和音楽大学音楽芸術運営学科および大学院音楽研究科音楽芸術運営専攻（アートマネジメント）と、慶応義塾大学大学院文学研究科の授業内容はアメリカ型に比較的近い内容であるといえる。

何よりも決定的な差異は、欧米のアート・マネジメント・プログラムが大学院教育として発展してきたのに対して、日本では学部教育として生まれたという点にある。これは、日本の雇用環境・雇用流動性と密接な関係があると筆者（中尾）は考える。日本では一旦就職した人が大学院に戻って再教育を受けるのは困難な面があり、学部卒業後に芸術組織に就職し、そこで叩き上げのマネージャーとなるのがこれまでの一般的な道であった。アート・マネジメント分野の大学院設置は、社会の要請と合致しない面もあったように思う。

このように定義が明確でない中で、アート・マネジメントの講座を担当する教員のバックグラウンド（専門領域や芸術組織での実務経験等）も様々であり、授業内容も大学によって一定でないのが日本の現状である。

4-4. 静岡文化芸術大学のアート・マネジメント教育

本学のアート・マネジメント・プログラムは、2000年に文化政策学部の中の芸術文化学科に始まった。マネジメント関連の知識、アートの中身についての知識(アート・マネージャーにとって自分たちが扱う製品<Artistic Product>の知識)、実務経験、これらすべてをこれから身に付ける学部新入生に対し、マネジメント教育のみを施したのでは、総合的な能力としては不十分であり、社会の要請に応えることにはならない。そこで、芸術文化学科ではアート・マネジメント系、ビジュアル・アート系、パフォーマンス・アート系と三本の柱を設け、学部生が大学を卒業したときにアート・マネージャーとしてバランスのとれた知識が身に付けられるように工夫されている。しかしながら、全体的に見ると、マネジメント科目を中心に組まれている前述のアメリカなどのプログラムと比較して、本学では芸術文化関連科目に多くの時間を割いており、カリキュラムの内容は大幅に異なっている。また、アート以外の科目に関しても、アメリカ型プログラムとは違って経営学の各領域を中心に組まれているものではない。

4-5. トリニティ・カレッジのアート・マネジメント・プログラム

英国の大学では、BA(学士)課程は3年、MA(修士)課程は1年というのが通常である。多くのアート・マネジメント・プログラムは修士課程であるので、アート・マネジメントのMAの学位(あるいはPostgraduate Diploma)は1年で取得できる。アメリカの修士課程のカリキュラムは基本的に2年で組まれているが、同等の内容のカリキュラムを1年の課程で組むことは困難であると思われるし、そのせいもあってか英国のアート・マネジメント・プログラムはアメリカ型とは様相を異にしている感がある。

一方、トリニティ・カレッジのアート・マネジメント・プログラムは、学位名はMBA Arts Managementであり、2年間のカリキュラムである。2005年に開設されたばかりの新しいコースで、2007年9月現在で2学年合わせて8人の学生が在籍している。在

籍している学生は、フルタイムとして芸術組織で働きつつパートタイムで通学するなど、皆が実務経験を有しているようである。

1学年度はターム1からターム3までの3学期に分かれ、2年の課程は以下の科目で構成されている。

Culturepreneurship (10 単位 < credits >)
Event Organization (10 credits)
The Business of Creativity (10 credits)
Funding and the Arts (10 credits)
Media Communication in the Creative Industries (10 credits)
Work Based Learning (10 credits)
Financial Management (10 credits) *
Human Resource Management (10 credits) *
Marketing: Concepts and Strategies (10 credits) *
Strategic Management (10 credits) *
Managing Research (10 credits)
Client Management (10 credits) *
Dissertation/Major Project (60 credits)

MBA Arts Managementの学位を取得するにはこれらをすべて履修し、180単位分の科目に合格する必要がある。MBAより下位のPostgraduate Diploma in Arts Managementを取得するには論文以外の120単位を、そして、Postgraduate Certificate in Arts Managementを取得するには一定の条件下で論文以外の上記科目から60単位に合格する必要がある。(アステリスク(*)の科目は、他専攻のツールズ・マネジメント・プログラムと合同で開講されている。)

トリニティ・カレッジのアート・マネジメント教員、クレア・トーマス(Clarie Thomas)教授によると¹⁵、カリキュラムはマネジメント関連科目を中心に組まれているが、それはAMBA(Association of MBAs)の認可を受けるためであり、実際の授業運営はよりフレキシブルに行われているということである。各科目の教科書にはイギリスで出版されたものが多く指定されているし、ウェールズの地域性を重視した内容のものも含んでいる。特に、Funding and the Arts

などでは、その傾向が著しいように思われる。

ウェールズはイングランドとはやや状況が異なり、比較的小規模な芸術組織が多い。現在の学生は全員がアートのバックグラウンドを持っているそうだが、マネジメントには必ずしも通じておらず、そういう学生にマネジメント教育を施し、芸術組織で正しい舵取りができるようなスキルを提供するのがプログラムの主な目的となっている。

4-6. トリニティ・カレッジとの交流の可能性

他の多くの英米の芸術・マネジメント・プログラムと同様、トリニティ・カレッジのプログラムは大学院課程となっている。静岡文化芸術大学の学部生が英語科目や学部の科目を取りながら、聴講生等として芸術・マネジメントの授業に部分的に参加することが可能であれば、留学して芸術・マネジメントを学べる可能性はある。逆に、トリニティ・カレッジの学生で日本の芸術・マネジメントや文化政策に関心をもつ者には、本学への留学は非常に有益であろう。

しかし、これまで述べた事情のため、トリニティ・カレッジと本学とでは芸術・マネジメントと銘打っていても、実際のところカリキュラム内容はかなり異なっている。もし学部生がトリニティ・カレッジに滞在するのであれば、授業についていくためには留学前にマネジメント関連科目を重点的に履修したり、学科のカリキュラムを越えて学習するなど、マネジメントの知識を大幅に強化することが必要と思われる。そして、実務経験を有する少人数の中に混じるのであるから、個人的に芸術組織でのアルバイトやインターンシップ（長期）の経験を持っていることが望ましい。

本学には大学院（文化政策研究科）もあるので、大学院生で芸術・マネジメントを専攻している学生にとっても、大学間で提携を結ぶことはメリットがあるだろう。また、本学の卒業生には芸術組織に就職する者も少なくない。卒業生が更に上を目指すために、卒業後（あるいは実務経験を経た後）にトリニティ・カレッジに留学するという選択肢も考えられる。

そして、教員間の学術交流も挙げられる。

芸術・マネジメント分野は設置されている大学数が世界でも限られているので、交流と協力の可能性は最大限に利用して、学術的レベル、教育レベルの向上に努める必要がある。それは必ずや学生や社会にフィードバックされるものと確信する。

芸術文化学科のカリキュラムは、国際的な視点からも対応できるように変化しつつある。トリニティ・カレッジとの交流の可能性は大いに検討し、前進させる価値があると思われる。

5. 留学プログラムについて

トリニティ・カレッジの学年暦（2007～08）では、新学期の秋学期（Semester 1）は9月から1月25日までだが授業が終わるのは12月14日、そして春学期（Semester 2）は1月28日から6月までだが（4月に春休みあり）授業が終わるのは5月16日となっている（授業の後に試験週間があるため）。

5-1. 正規留学「ファウンデーション・プログラム」について

トリニティ・カレッジには、「ファウンデーション・プログラム」（International Foundation Programme in English Certificate）という留学生向けのプログラムがある。英国の教育制度は日本の教育制度と異なり、大学は3年間である。その代わりに、1年生から専門課程に入る。それに対して、日本の大学は4年間のカリキュラムが組まれており、最初の1年は一般的に教養科目を学ぶようになっている。そこには専門科目に入る前の導入科目やリテラシー科目、外国語科目が配置されている。そこで、（英国から見て）外国からの留学生がすぐに英国の大学の1年生になるのは学力的に無理なので、留学生のために用意したのが「ファウンデーション・プログラム」（基礎教育プログラム）である。これは単位認定授業である。

具体的にトリニティ・カレッジの「ファウンデーション・プログラム」をみても、授業科目には、「English for Academic Purposes」（アカデミック・イングリッシュ）、

「English in Context」(英語4技能)、「Information Technology」(ITスキル)、「IELTS Preparation」(IELTS試験対策)、「U.K. Culture & Education」(イギリス文化・教育)があり、1年間(9月～6月)の履修で、計120単位というカリキュラムになっている。

英語力がすでに、「IELTS」(アイエルツ)¹⁶という英国留学試験で、「6.0」(TOEIC換算点で約660点)を有する者は、そのまま学部課程(Undergraduate)に入学することができる。その英語力に達しない場合は、まず、1セメスターか2セメスター、「ファウンデーション・プログラム」に入学することになる。これに必要な英語力は、「IELTS 4.5」(TOEIC換算点で約450点)である。「ファウンデーション・プログラム」に在籍しながら、学部科目を聴講したり、履修したりすることも可能であろう。

5-2. 夏期語学研修(英語)プログラム

トリニティ・カレッジが本学との交流において最初に始めたいと提案しているのが、8月第3週から9月第2週までの4週間集中英語プログラムである。これは、いわゆる町の英会話学校が営んでいるようなレベルの英会話学習ではなく、トリニティ・カレッジの「ファウンデーション・プログラム」の1部を凝縮したような教育内容になっている。具体的には、パワーポイントを使って英語でプレゼンをしたり、英語でアカデミック・エッセイを書いたりする、大学生としての学業レベルに相応しい内容になっている。そこで、修了すると、トリニティ・カレッジの単位認定授業として単位が与えられる。今まで本学で実施してきた語学研修は、学生が多額の費用を払い、約1ヶ月の学びをしても単位にならないので、参加した学生たちから、単位が取れるようにしてほしいとの要望が多数寄せられていたことを思い出すと、これは好条件である。

参加学生は学生寮に滞在し、3食付きである。英語の授業の他に、イギリス文化やウェールズ文化に関するレクチャーもあり、また毎週金曜日は美術館等のフィールド・トリップの日で、ロンドン1泊旅行もこのプログラム

に含まれている。イタリア等のヨーロッパからトリニティに来ている他団体と本学グループとの混合クラスが想定されている。

5-3. 留学した場合の諸経費と留学生の受け入れ体制、および単位認定について

授業料については、1ポンド250円で計算すると、学部課程(Undergraduate)が1年間で6,500ポンド、約162万5千円。「ファウンデーション・プログラム」の授業料は5千ポンドで、日本円にして1年間で約125万円である(2008年度)。秋学期だけの場合は、その半分の約62万5千円である。

学生寮費については、部屋代のみで食事なしの場合、1年間で2,700ポンド、日本円で約67万5千円である。秋学期だけの場合は、その半分の約34万円になる。

留学生の受入体制については、まず留学生は全てキャンパス内の学生寮(ベッド数が600ある)に入る。学生寮の建物により詳細は異なるが、おおよそ1人1部屋で、最低限の必要な設備はみな完備されている。ラウンジや台所は共有。自炊もできるし、キャンパス内のカフェテリアを利用することもできる。徒歩で15分くらいのところに「テスコ」(TESCO)という24時間営業の大きなスーパーがあり、お寿司でもお米でもほとんど何でも売っている。キャンパス内にも売店はある。

空港については、ロンドン・ヒースロー国際空港かカーディフ国際空港が考えられるが、どちらに到着しても、大学までの送迎サービスを受けることができる。ロンドン・ヒースロー空港には英国系、ヨーロッパ系、アジア系航空機が飛んでいる。カーディフ空港に関しては、成田からKLMオランダ航空を利用して、アムステルダムまで飛び、そこで乗り継ぎをしてカーディフまで行くことができ、とても便利である。

夏期語学研修だけでなく、長期留学生にも、ウィークリー・エクスカージョンとして、週末に大学が主催する留学生対象の小旅行があり、ロンドンやバースなどに行くことができる。クリスマスの時期にヨーロッパ旅行をする留学生が多いが、クリスマスを一緒に過ごすカマーゼンのホームステイ先を大学は紹

介してくれる。カリキュラム外の活動として、写真や美術作品の展示会、および大学をあげて取り組んでいる6月の盛大なフェスティバル「6月祭」など、芸術環境はうらやましいほど優れている。

単位認定については、学部課程で取得した単位は「ウェールズ大学」が認定する単位であり、ファウンデーション・プログラムで取得した単位は「トリニティ・カレッジ」が認定する単位となる。正式な成績票の交付がある。履修登録については、シラバスや時間割のデータの入ったCD-ROMが事前に留学予定者に渡され、2週間程度で手続を行う。履修登録の相談も行っている。

キャンパス・ライフの面を総合的に判断すると、日本人やアジア人が本当に少なく地元学生と友達になれる環境にあり、安全性、恵まれた環境、夏は涼しく冬は暖かい穏やかな天候、学費や物価が比較的安い、イギリスの良さがそのまま残っている等の理由から、日本人大学生の長期留学に最適な大学といえる。

6. トリニティ・カレッジと本学の国際交流に向けて

トリニティ・カレッジと本学（静岡文化芸術大学）の共通点として、次の4点を挙げることができよう。

- (1) 文化と芸術分野を中心とし、且つ、実践的な教育を重視するカリキュラムを持っていること。
- (2) 地域文化と産業との連携を重視しており、地域の文化芸術センター的な役割を果たしていること。
- (3) 地方の中核的都市に位置し、1500人から1800人ほどの学生を擁する、教育重視の小規模大学であること。
- (4) 大学の教育環境とカリキュラムを国際化し、教育効果を高めるために、国際交流事業を重視していること。

また、トリニティ・カレッジを、本学生の留学先として検討する際のメリットとしては、次の5点が挙げられる。

(1) 1年生の夏に語学研修でトリニティ・カレッジに行き、気に入れば、2年生の秋から長期留学をする。あるいは、2年の夏の語学研修から引き続き、帰国せずにそのまま留学して、後期の授業を取るという道も考えられる。

(2) ファウンデーション・プログラム（通常1年、半年も可能）により、英国の大学教育で必要とされるアカデミック英語やリテラシー教育およびイギリス文化・教育の授業が受けられ、単位を取得することができる。ファウンデーション・プログラムの修了後は、トリニティ・カレッジの学部（院）入学が保証され、また英国内の他の大学の受験資格も得られる。

(3) ファウンデーション・プログラムに在籍しながら、学問的興味のある学部科目を聴講したりすることで、本学の学科専門科目やゼミに連動するような学びをすることができる。

(4) カマーゼンは英国内、またウェールズでも物価が安く、環境も良く暮らしやすい。

(5) 小規模校のため落ち着いた家庭的な雰囲気があり、留学生に対するサポート体制は万全で、非常に面倒見が良い。大学があるカマーゼンも英国内で最も治安の良いところとの評価を得ている。日本人留学生にとっては真に住みやすい町といえよう。

トリニティ・カレッジを、本学生の留学先として検討する際のデメリットとして、次の2点が挙げられる。

(1) 日本ではウェールズの知名度が比較的 low、本学生のウェールズについての知識も少なく、関心も低いかもしれない。

(2) カマーゼンは市として小規模であり、日本からの留学生が英国の多様な文化や社会状況に接する機会が少ないかもしれない。

(1) に関しては、専門分野がウェールズと関連する教員が少なからずいるので、学内でウェールズ研究会を開催したり、トリニティ・カレッジおよびウェールズを次年度以降も訪問して研究を継続していく。その成果は授業やゼミ、（公開講座）を通して、学生や

(市民)に自然と還元されていくであろう。(2)に関しては、イギリスは面積としては小さい国で、鉄道や長距離バスなど公共交通網が整っているため、週末や長期の休みを使って、ロンドンを始め英国内諸都市、さらにはヨーロッパ諸都市に旅行に行くような機会を容易にもてるので、それによって解消されるであろう。

以上みてきたように、ウェールズ大学トリニティ・カレッジと本学は、教育内容に共通点があるので、慎重にお互いの大学の特徴を伸ばす形で関係を進展させることにより、相互に恩恵を得る関係を築くことが出来るであろう。英国に学術交流協定校があることは教員にとってもヨーロッパ圏に拠点を持つようなもので、研究活動にも大いにプラスになるであろう。

[1-2章と5章および結論を鈴木が、3章と6章を森が、4章を中尾が担当した。この研究及び視察にあたっては平成19年度文化政策学部長特別研究費の助成を受けた。掲載写真は全て訪問時に鈴木が撮影してきたものである。]

注

- 1 インターネットでは、www.visitwales.comの公式サイトがウェールズについて情報を提供している。
- 2 英国の構成国でグレートブリテン島西部に位置する。1284年にイングランドに征服され、1536年にイングランド併合された。英国の国旗、ユニオンジャックにウェールズ旗が組み込まれていないのはウェールズがイングランドに併合されたためである。国旗の赤い龍は7世紀にウェールズ王国の紋章に採り入れられた。赤い龍はケルト人の建国伝承からで、ウェールズの地に平和をもたらしたといわれる。緑と白は13世紀にウェールズ大公になったルウェリンの制服の色といわれる。
- 3 デビッドはセント・ディビッドの修道院長となった後、西暦589年3月1日に逝去。3月1日のセント・ディビッド・デーはウェールズ国内はもとより世界中のウェールズ人が祝福する日となっている。
- 4 ウェールズ語はケルト系言語で、ブルトン語やすでに消滅したコーンウォール語と密接な関連がある。ウェールズ語の起源は6世紀初め頃とみられている。その後、アングロ・サクソン人の侵攻により英語が流入し、13世紀末イングランドのノルマン王朝がウェールズを支配すると、徹底したイングランド化が推進された。1536年のイングランド併合で英語が

公用語となる。だが、18世紀においてもウェールズ人人口の8割がウェールズ語を話していたという。しかし、産業革命によりカーディフなどの南東部が工業地帯化し、19世紀半ばから英語を話すイングランド人労働者が流入、さらに教育法の施行(1870年)で教育現場での英語化が進んだ(学校でウェールズ語を話した生徒は罰せられた)。第1次世界大戦でウェールズ人兵士の戦死によりウェールズ語人口が激減、また1929年の世界恐慌から約50万のウェールズ人がイングランドやアメリカに移住し、さらに減少する。1970年代に人口の20%(50万人)にまで落ち込んだ。ところが、1925年にウェールズ国民党が設立され、1962年にウェールズ語復興の演説が行われると、ウェールズ語協会も設置され、1951年のウェールズ省設置や、67年のウェールズ語法の公布により、ウェールズ語は復活していく。1937年にBBCウェールズが設立され、1982年にテレビ局に「ウェールズ・チャンネル4」も生まれた。今日、ウェールズ語で授業を教える学校がウェールズ全体の25%となり、ウェールズ語を話せない親たちが自分の子どもにはバイリンガルになってほしいと願っているという。(武部好伸『ウェールズ〈ケルト〉紀行』彩流社、2004年。参照)

- 5 『マビノギオン』(中世ウェールズ幻想物語集)は有名で今でも多くの人に親しまれている。
- 6 詩人ディラン・トマスの功績を祝うお祭りは、故郷スウォンジーで毎年10月27日から11月9日まで開かれ、読書会やドラマ発表、展示などが行われている。
- 7 「ウェールズ議会はカーディフ・ベイに置かれ、議員はウェールズの人々による直接選挙で選出されます。ウェールズ議会はウェールズの地域活性化における意思決定機関であり、その存在は英国はもとより、EUにおいてもより強いリーダーシップを発揮しています。」(インターナショナル・ビジネス・ウェールズ<ウェールズ議会政府>発行の小冊子『This is Wales - ウェールズのご紹介』1ページより引用)。
- 8 「太陽電池製造で世界トップシェアを誇るシャープは、バンガー大学、ウェールズ・オプトエレクトロニクス・フォーラム、ディーサイドカレッジ、エコセンサーとの共同プロジェクトとしてウェールズのレクサムで太陽電池モジュールの開発・製造を進めている」(前掲書10ページ)。
- 9 良質のチーズ、ラム肉、草だけで育てた牛肉などはウェールズの特産。ウェールズにはシーフードも豊富である。
- 10 林容子『進化するアートマネジメント』(川崎：レイライン、2004年)
- 11 *Guide to Arts Administration Training 1993-94* (New York: American Council for the Arts, 1993).
- 12 *Training Arts Administrators* (London: Arts Council of Great Britain, 1971), 3.
- 13 アメリカではアーツ・マネジメントとは非営利部門を中心として扱う分野であるのに対し、ヨーロッパ的な解釈では営利、非営利部門の芸術組織さらには行政部門まで含むということ、昭和音楽大学名誉教授の渡辺通弘氏は指摘している。渡辺通弘「アートマネジメントの意義と人材養成の課題」、『舞台芸術に関わる人

材の現状と養成の課題』(東京：(社)日本芸能実演家団体協議会、2003年3月)、25。

- 14 河島伸子「文化政策のマネジメント」、後藤和子編『文化政策学』(東京：有斐閣、2001年)、131。
- 15 筆者(中尾)によるClare Thomasへのインタビュー、Carmarthen、2007年9月24日。
- 16 「IELTS (アイエルツ)とは、the International En-

glish Language Testing Systemの略である。イギリスを中心とした英語圏(イギリス、オーストラリア、ニュージーランド、カナダ、アメリカ)の大学に進学したいと考える留学生が入学を認められる条件として課される、世界的に認められた試験である。」(石谷由美子『はじめてのIELTS—イギリス留学試験』南雲堂、2004年。参照)。